ＮＯ・２・Ａ面　昭和49年５月？日　　吉本

桂枝加附子湯

（方極文）「桂枝湯証にして、而して悪寒し、或は支節微痛する者」

桂枝湯に附子が入っている処方だから悪寒があるということ。支節とは関節のことで少し痛みがある。しかしここは悪寒はなくとも手足が冷えるということでもいいわけよね。

それに痛むのが関節でなくてもいいんだよ。ここでの意味では関節というわけですが筋だってもいいし筋肉だっていいんだ。

「桂枝湯方内において、附子一枚を加える。桂枝、芍薬、大棗、生姜（各六分）甘草（四分）附子（二分）右六味。煮ること桂枝湯の如くにす」

第一条「太陽病。発汗し、遂に漏れ止まず。その人悪風し、小便難く、四肢微急して、以て屈伸し難き者」

桂枝湯症を治療していてこれが少陰病にまで及んできて、太陽病であるけれど少陰病が少し混ざってきている状態。正症が壊れて壊症のような状態になった場合だね。ここで「遂に」という語句の使われ方だが前後の文体からみて原因として太陽病を『発汗した』ことにより結果として『漏れて止まない』という場合に使われるんだ。

そして寒けがして小便がスムーズに出ないということだ。汗がたくさん出た後は小便が出にくくなるということがある。あなたたち！汗をかいた後で小便をしたら出にくくて少し痛いというような経験をしたことない？小便がうんと濃くなって水分がなくなるからね。

吉本：淋瀝という状態とは違いますか？

大塚：まあ淋瀝の軽い状態だね。ここでは汗がうんと出た為に体液が失われてこうなるんだ。手足が引きつれると書いてあるがひどく引きつれるのではなくて体液がなくなった為におこるんだ。あんたたちはコレラの患者を見たことないと思うが急性の霍乱で、いわゆる吐き下しで身体の水分が急に失われると手足が引きつれるんだ。それの軽い状態だ。小便が少ないということも手足が引きつれるということも身体の体液が失われた為に起きるわけだね。「以て」というのはその為にということで手足を屈伸がしにくくなる。

だからこの文章では汗を出した為に身体の陽気が失われて陰の気が盛んになり、寒けがして小便が出にくくなって手足が引きつれてうまく動かないということが書いてある。

昔私がまだ漢方をやらない時に、一人の患者がいて腸チフスだったんだろうと思うけれども、熱が39度くらいあって一週間たっても十日たっても治らないからアスピリンのような薬でどんどん汗を出したんだ。そしたら汗が出た後から小便が出にくくなって足が引きつ

れてきたんだ。まさにここの条文とよく似ているんだ。欄外を読む。

○「この方に朮を加えて、桂枝加朮附子湯と名づく。中風偏枯、痿躄、痛風、小便不利、或は頻数なる者を治す。また黴瘡、結毒、筋骨疼痛、諸瘍疽、淤膿つきず、新肉生ぜずして、遷延癒えない者は、応鐘、伯州、七寶、十幹、梅肉の類、よろしきに随って之れを兼用す。黴瘡、結毒には、或は薫剤を用いる。薫剤を用いる者は、その間湯薬を停む。若し心悸し眩暈し、身潤動する者は、茯苓を加えて、桂枝加茯苓朮附子湯と名づける」

ここの中風は傷寒論でいう中風ではなくて脳出血とか脳軟化症による中風のこと。偏枯というのは半身麻痺のこと。痿躄というのは足が立たなくなって歩けなくなるような症状。痛風も今日の痛風ではない。今日の痛風は私たちが学生の時には日本にない病気だと言われた。欧米に多い病気で血液に尿酸が多くなって関節が腫れてきて痛みが出てくるんだ。風というのはあちこち動き回るということで痛みがあちこち動くということ。それで小便が出にくい場合も回数が多い場合でもこれでいいというわけだ。だから桂枝加朮附子湯は半身不随、それも脊髄性の麻痺で歩けない場合や、リウマチ性の痛みに効くわけでしょう。一人鎌倉からの患者でスモンなんだがこの処方でとてもよくなったことがある。そうゆう者や中気の者。吉益東洞が晩年に一番多く使った処方です。黴瘡・結毒というのは第三期梅毒のことです。骨に穴があいたり鼻が取れたり一所に毒がからんでいるのを結毒といいます。筋肉や関節が痛く諸々の瘍疽、瘍疽とは瘍と疽に別れておりどちらもカルブンケルなんだが瘍は陰陽の陽に通じ陽性のカルブンケルで疽は陰性のカルブンケルなんだ。

瘍は色が赤くなって腫れて痛んでそこから膿が出たりするでき物で、疽はむしろ皮膚がへこんで赤くもならず色つやも悪く張り出してこない。疽のほうが治りが悪いんです。瘍のほうが治りやすいんです。それから淤膿つきずとは汚い膿がいつまでも出て新しい肉芽が盛り上がらない。ひじょうに新陳代謝が悪い状態ですね。そしていつまでも治らないものを治すんだと。応鐘散というのは川芎と大黄が入った薬ね。伯州散はこの前説明したね。七寶丸は水銀剤が入っている。梅肉というのも下剤です。梅毒の患者によく使ったんだ。薫剤というのは煙を使って治す治療法で私が若い時にはこれ専門でやっていた人がいた。やはり梅毒の治療が主だった。薫剤の治療をする時には煎じ薬は飲まないとある。若しめまいがしたり動悸がして身がぴくぴくする時には茯苓を加える。

吉本：痔の治療に薫剤を使う方法があったように本で読んだんですが？

大塚：それは金匱要略の中に出てくるでしょう。雄黄、即ち鶏冠石を使う処方にある。あれは肛門に煙をあてる方法だがここでは肛門だけでなく鼻から蒸気や煙を吸わせる方法も

含んでいるでしょう。ひじょうに瞑眩が強いらしいです。

○「小便難なる者とは、出るに快からざるなり」

○「本草綱目の、附子の条に、宋の雷＿の曰く。附子一個、重さを一両とするは、即ち気全。弘景のいわゆる皮を去りおわり、半両を以て一枚に準ずると、相近し。これまた野生の物を謂うのみ」

この前北里の薬剤師連中が壬生の岬？に附子を採りに行って帰ってから皮を取り去って炮じてみたけどあまり出来はよくなかったが何とか使えるくらいにはなったと言っていた。まだ季節が早くって附子が小さくて乾かしたら楊枝の先くらいになってだめだと言っていた。

吉本：桂枝加附子湯の条文の中で、発汗し過ぎて汗が止まらなくなり陰証に堕ちたというような表現がされていますが状態としては少陰病になったと解釈していいんでしょうか？

大塚：いいや。ここでは桂枝を使わなければいけないのだからまだ完全な陰証ではないんだ。まあ壊病という状態じゃないの。純然たる少陰病ではないでしょう。太陽病だが少陰病にかかっている状態でしょう。

吉本：大塚先生の傷寒論講義には「その人悪風し」という箇所を『冷え性の人』という表現をされていますがどうゆう意味でしょうか？

大塚：それはね、ここの場合は条文からして熱がある場合をさすけれど、普通リウマチや神経痛にこの処方を使う場合には寒がりや足が冷える人が多いという意味であって「悪風」が『冷え性』とか『寒がり』という訳ではありません。「悪風」というのは「悪寒」の軽い症状のこと。

吉本：それとここは「疝」について書いてあると思いますが？

大塚：桂枝加朮附湯と桂枝加附子湯は「疝」に使います。どんなことが書いてあるか説明してみろ。

吉本：大塚先生の東洋医学会誌の別冊の中に「疝」についての論文があり、はっきり覚えていませんが『疝とは下腹が痛み、引きつれることで、足の厥陰経にかけ痛むもの』とあります。桂枝加附子湯や桂枝加朮附湯以外にも当帰四逆湯とか当帰四逆加呉茱萸生姜湯でも「疝」が問題にされているわけですけれど。

大塚：けっきょくね。桂枝加附子湯などが使える場合は冷え性の人が多く、冷えるとさらに痛みがひどくなってくるんだ。どちらかというと下腹部のほうがむしろ痛みが強く、その痛みが足のほうまで放散したりするんだ。つまり冷え性だということが大事になってく

るんだ。「疝」というのはそのような状態と思えばいい。特に胃腸の弱い人に多いいんだ。

吉本：津田玄仙の療治茶談の中に病気のほとんどは疝だというようなことが書いてあるのですがそれに関してはどうでしょうか？

大塚：はは・・ちょっと多過ぎはしないかね。しかし療治茶談では桂枝加附子湯と桂枝加朮附湯を一番多く使っている。けれど冷え性で腹が痛む場合はかなり「疝」の状態があるだろうよ。じゃあ先に行くか。　（先生とのやり取りが少し緊迫気味！）

桂枝去芍薬加附子湯

（方極文）「桂枝去芍薬湯証にして、而して悪寒する者」

「桂枝去芍薬湯方内において、附子一枚を加える。

桂枝、大棗、生姜（各七分五釐）甘草（五分）附子（二分五釐）

右五味。煮ること桂枝湯の如くにす」

第一条「太陽病。之れを下して後。脈促胸満の者、桂枝去芍薬湯之れを主さどる。若し微悪寒する者」

太陽病を誤って下して、それで症が変わって、脈促とあるのは脈が速くて時に結滞するようなことだが実際上私たちはこのような場面にはいきあたらないけどね。胸満というのはみぞおちから上が張ったような感じになることだ。胸満というのは他覚的には証明できないから自覚症状だね。処方では芍薬がなくなると症状が上の方に出て芍薬が多くなると症状が下に出てくるんだ。ちょうど芍薬が上に上がらないように抑制して桂枝が上衝を下げるようにしている。錨のような働きがあると思えばいい。だから桂枝加芍薬湯の場合では下腹が張ってくる。そして脈もそんなに速くない。芍薬を除くと脈が速くなってくる場合と思えばいい。

吉本：ここでは桂枝去芍薬湯ですが桂枝加芍薬湯のところで太陽病を誤って下した為に太陰病となって腹満時に痛むとなっています。そして先に出ました桂枝加芍薬大黄湯では太陽病を誤って下して陽明病になって腹が大実痛するわけですか？

大塚：うん。純然たる陽明病ではなくて陽明病に属するわけだな。

吉本：この桂枝去芍薬湯でも誤って下していますが太陰病になっているのでしょうか？

大塚：いやまだ太陽病の位置から去ってないんだよ。次にいこう。

桂枝附子湯

（方極文）「桂枝去芍薬湯証にして、而して身体煩疼し、自ら転側すること能わざる者」

「桂枝四両（八分）附子三枚、生姜三両（各六分）甘草二両（四分）大棗十二枚（六分）右五味。水六升を以て、煮て二升を取り、滓を去り、分温三服す（水一合八勺を以て、煮て六勺を取る）」

第一条：「傷寒八九日。風湿相搏ち、身体疼煩し、自ら転側すること能わず。嘔せず、渇せず、脈浮虚にして濇の者は、桂枝附子湯之れを主さどる。若しその人大便硬く、小便自利する者は去桂枝加朮湯之れを主さどる」

按語：「為則按ずるに、まさに上衝の證あるべし。この方と桂枝去芍薬加附子湯と同じにして、而して治は方名と異なる。彼の方の下に曰く。微悪寒と。この方の下に曰く。身体疼煩、悪寒軽く、疼煩重し。独り附子の多少にあるのみ」

この処方は前の桂枝去芍薬加附子湯と薬味構成は同じだけれど附子の量が多いね。しかし実際の問題として我々が使っている処方ではあまり厳密に量加減はしないよね。だからこの二つの処方は同じように使えるわけだよ。だから吉益東洞が言うように杓子定規に考えると窮屈でうまく使えない。桂枝去芍薬附子湯では必ず脈促胸満かというとそうばかりでもなく四十度位の高熱が出ることがあるんだ。そして関節が腫れ上がることがあるんだ。だから薬は臨機応変に使わなければいけないんだ。傷寒論に書いてあることは一つの見本のようなものだから、いつでも条文通りになるとは限らない。ただここで面白いのは自分で転側できない・身動きできないとあり、吐き気もなく喉も渇かないとある。そしてその後に「脈浮虚にして濇」とあるが、私がこの処方を使った痛みのひどい患者はわりと脈が大きいんだよね。「虚」の脈といっても沈んでいる脈ではなくて比較的大きな脈なんです。「濇」という脈は滑らかでないという意味だけれど、熱があるわりには脈が速くならない傾向がある。けっきょく陰陽にまたがっているからね。

吉本：「風湿相搏ち」というところはどう解釈するのですか？

大塚：「風」というのは外から入ってくる外邪性のものだ。「湿」というのはこの人が平生から持っている水毒だ。だから水毒があるところに外邪が入ってきて以下条文の症状が出てくるわけだ。リウマチや神経痛の患者の中に明日雨が降るという時に痛むことがあるだろう。それは身体に「湿」があるからだろう。だから「風」と「湿」が結んで痛みが出ると解釈すればいい。

吉本：「水毒」という言葉は後世方で使う言葉ではないのですか？

大塚：後世方ではなくて昭和の漢方で使う言葉だ。昭和以外に水毒だなんて使った時代はないんだから。湯本先生あたりから出たんではないかな。特に長濱君（長濱善夫）あたり

がよく使った言葉ではないかな。

吉本：条文だけで判断してはいけないかもしれませんが、柴胡加竜骨牡蠣湯や白虎湯の条文でもここの条文と同じように自分で身体を自由にできないという箇所がありますね？

大塚：うん。そのことは私の論文の中でも書いたことがあるけれども、ここの条文にある「嘔せず喝せず」というところで鑑別しようとしたわけだ。「嘔せず」ということは柴胡剤の症がないということで「喝せず」というのも白虎湯の症はないというようにね。そこで区別するんだということを書いたことはある。けど実際問題として傷寒では柴胡加竜骨牡蠣湯や白虎湯で動けなくなることはあるだろうけれど、一般雑病で寝返りもできないという時に柴胡加竜骨牡蠣湯を使うことはない。五十肩で柴胡加竜骨牡蠣湯を使うことがあるがそこまで痛むことはないからな。白虎湯だってね同じことが言えるし実際に痛みがひどくて熱が三十九度から四十度あるような場面は出くわさないんじゃないの。往診で行く時にはあるかもしれないが外来ではないだろう。伊藤君欄外読んでくれるか。

○「この方、また朮を加えて効あり。痛風及び結毒にて、沈著痛をなす者を治す。応鐘散、或は七寶承気丸を兼用すれば、その効甚だ速し」

桂枝附子去桂枝加朮湯

（方極文）「桂枝附子湯証にして、而して大便難。小便自利し、上衝せざる者」

「桂枝附子湯方内において、桂枝を去り、朮四両を加える。

朮（八分）附子（六分）甘草（四分）大棗、生姜（各六分）

右五味。水三升を以て、煮て一升を取り、滓を去り、分温三服す。（煮ること桂枝附子湯の如くす）一服にして身痺れるを覚えれば、半日ばかりにして再服す。三服を都てつくして、その人帽状の如くは、怪しむ勿れ。即ち之れ朮附の竝せて皮中を走り、水気を逐って、未だ除かるるを得ざるが故のみ」

按語：「為則按ずるに、桂枝附子湯証にして、而して衝逆なき者なり」

一服飲んで身体がしびれる者は半日してまた飲めと。一日二回に服用するということ。三服を全て飲みつくして帽状だから頭に何か被ったようになっても心配するなと。これは朮と附子が合わさって水気を逐い出そうとして働くが、まだ完全に水気を逐い出してないという意味だな。「怪しむ勿れ」とあるがむしろ附子の中毒症状だと思うけどね。

第一条：「傷寒八九日。風湿相搏ち、身体疼煩し、自ら転側すること能わず。嘔せず、渇せず、脈浮虚にして濇の者は、桂枝附子湯之れを主さどる。若しその人大便硬く、小便自利する者は」

按語：「為則按ずるに、桂枝附子湯証にして、而して衝逆なき者なり」

これは金匱要略でいう白朮附子湯で眩暈なんかに使うんだね。この処方は荒木正胤君が好きな処方の一つだ。真似して龍野君もよく使うけどね。龍野君は古今東西にして荒木正胤君くらいの名医はないと言っているんだ。荒木君に心服しているんだ。欄外。

○「この方、脈経、玉函、千金翼に、皆朮附子湯と名づく。古義を失わざるに似たり。金匱には白朮附子湯と名づく。外臺には附子白朮湯と名づく。而して金匱にはその量を半折す。ともに古にあらざるなり。朮の蒼白を分かつは、陶弘景以後の説のみ」

○「按ずるに、金匱白朮附子湯は、その量桂枝附子湯の半折にして、而して朮二両を加える。故に水三升を以て煮て一升を取るなり。今桂枝附子湯全方中に、朮四両を加える。則ち煎法はまさに水六升を以て煮て二升を取るべしと。此は中村子亨の校讎の粗なり」

○「小便自利は、不禁と曰うがごとし。朮附子茯苓、皆小便不利自利を治す。桂麻の無汗自汗を治すが如し」

中村子亨は吉益東洞の門人だ。「校讎」というのは校正すること。中村子亨が東洞先生の言ったことをまとめて校正する時に「粗」とあるからいいかげんにやってしまったから間違ったという意味だね。東洞先生が間違っておったって弟子のせいにするんだよ。先生を攻撃するわけにはいかんからな。じゃあ甘草附子湯にいこう。伊藤君読んでくれるか。

甘草附子湯

（方極文）「骨節煩疼し、屈伸することを得られず、上衝し汗出で悪寒、小便不利する者」「甘草、朮各二両（七分五釐）附子二枚（五分）桂枝四両（一銭）

右四味。水六升を以て、煮て三升を取り、滓を去り、一升を温服す。（水一合二勺を以て、煮て六勺を取る）日に三服す。初め服して微汗を得れば則ち解す。よく食し汗出で、また煩する者は五合を服す。一升の多きを恐れる者は、六七合を服す。妙となす」

附子の瞑眩を恐れて一升を飲んだのでは多過ぎるという意味でしょう。

第一条：「風湿相搏ち、骨節煩疼し、掣痛して、屈伸を得られず。之れに近づけば則ち痛み劇しく、汗出でて短気し、小便不利し、悪風して衣を去ることを欲せず、或は身微に腫れる者」

按語：「為則按ずるに、まさに衝逆の證あるべし」

甘草附子湯のほうが桂枝附子湯よりも痛みが劇しい時に使うということがここの文章でわかると思う。風邪とその人の水毒とがぶつかりあって関節が痛んで、掣痛というのは引きつれるような痛みということ。それで関節を伸び縮みできないわけだ。そして人が枕元に

近付いただけで痛むということ。リウマチのひどく痛む場合は柱時計がチンチンと鳴っただけで痛むんだ。この症状は急性の関節リウマチで熱のある場合が多くその場合汗がよく出るんだ。汗が出るのが特長でここの条文でも「汗出で」とあるでしょう。そうゆう場合は心臓の内膜炎を併発しやすいから「短気」とあるように脈が速くなって息が促迫してくる。汗がうんと出るから小便は出にくくなる。そして悪風して寒い寒いと言って衣服を取り去ろうとしない。そして軽い浮腫が起きる。これは多発性の急性関節リウマチで痛みがかなりひどい場合のことを書いてあるけれども、こんなに劇しくなくても外来の患者で歩いて来ることができる者でも効くことがある。うちに来ていた女の患者で慢性になっているリウマチだったんだが甘草附子湯ですごくよくなって喜ばれたことがある。激痛でなくても効くことがあるんだ。ここの条文は甘草附子湯の使える人で重い症状のことが書いてあると思えばいい。欄外にいこう。

○「この方、千金の脚気門には、四物附子湯と名づける。方後に曰く。体腫れる者は、防已四両を加える。悸気し小便不利には、茯苓三両を加える。玉函には、甘草朮各三両に作る。今之れに従う」

本の違いによって同じ処方出も名前が違うんだよね。葛根湯でも傷寒論と千金方だったかな入っている薬の内容が違うんだ。厳密には本の名前を処方の初めにつけないとわからないんだ。日本では中国と違いそんなに変わった処方を使わないから大丈夫なんだが。そして体が腫れる者は防已を加えたり、動悸がして小便が出にくい者は茯苓を加えるとある。防已は腫れをとるだけでなく鎮痛作用があるんだよ。昔『主婦の友』で宣伝して神経痛、リウマチにいいということで防已、則ちオオツヅラフジの茎をうんと売ったことがあるんだ。利尿・鎮痛・強心作用があるんだ。玉函経は傷寒論の異本だがその中に甘草朮が三両となっているということ。

○「風毒、痛風等を治す。而してその之く所は桂枝附子湯と、ほぼ似て而して劇しき者なり。学者よろしく親しく験して自得すべし。症に従って＿寶丸、七寶承気丸、再造散を兼用するを、佳となす」

「風毒」というのは関節だけでなく筋肉等がばい菌が入ってふくれあがっている状態をいう。たとえばリンパ腺炎や筋肉炎等で外邪性の病気であるため病名に当てはめれば色々なものがある。痛風もリウマチ様のものもあればその他の病気も含む。

○「廣韵に曰く。妙は、好なり。妙と為すとは、猶好と為すを言うなり。按ずるに、徐彬の金匱論註、沈明宋編注には並んで佳と為すに作る。義また通ず。玉函、始めと為すは誤

りなり」

○「掣は、正字通に云く、陳列切にして音は徹、意は牽曳なり。唐韻、尺制切、義は同じ」

「廣韵」とは六朝時代の字引です。「妙」という字は「好」とも使うと。「六七合を服すを、妙となす」というのはそれで好いという意味だと。「徐彬」とは人名。「妙」を「始め」にした玉函は誤りだと。「正字通」も「唐韻」も字引です。先ほども言ったようにこの処方は急性の多発性リウマチに使うけれど、慢性のリウマチの場合にも使うし、場合によっては防已を加えたり茯苓を加えたりして使うんだ。次にいこう。

桂枝去桂加茯苓朮湯

（方極文）「桂枝湯証にして、而して悸し小便不利し、上衝せざる者」

「桂枝湯方内において、桂を去り茯苓朮各三両を加える。餘りは前法に依る。小便利すれば則ち癒える。芍薬、大棗、生姜、茯苓、朮各六分　甘草四分

右六味。煮ること桂枝湯の如くにす」

第一条：「桂枝湯を服し、或は之れを下し、すなわち頭項強痛し、翕翕として発熱し、汗なく、心下満して微痛し、小便不利する者」

按語：「為則按ずるに、まさに心下悸の証あるべし」

桂枝去桂枝加茯苓朮湯の欄外から（読み）

○「桂枝去桂加茯苓朮湯の、去桂の二字は疑うべし。太陽篇の瓜帯散の条に曰く。病桂枝の症の如く、頭痛まず項強ばらずと。これ頭痛項強は、本桂枝の症なり。今已に桂枝湯を用い或は之れを下すといえども、仍お頭項強痛して、翕翕として発熱止まず。これ桂枝湯症は、依然として仍お在るとなす。何んぞ桂枝を去るを得んや。況や主薬を去るの理なし。これが故に夫れ桂枝去芍薬加附子湯、桂枝去芍薬加皀莢湯、桂枝去芍薬加蜀漆竜骨牡蠣湯、柴胡去半夏加栝蔞湯、木防已去石膏加茯苓芒硝湯等の処方の如きの、その去加する所は、皆臣佐の薬品に過ぎず。以て證すべし。後に徐霊胎の説を読むに、亦余の意と合すること符契の如し。益々鄙見の愆ざるを信ず。成無已の亦曰く。頭項強痛、翕翕発熱、汗下を経ると雖も、邪気仍お表に在るなりと。心下満微痛、小便自利する者は、則ち結胸を成さんと欲す。今外症未だやまず、汗無く小便不利し、則ち心下満微痛するは、停飲と成すなり。桂枝湯を与えて以て外を解し、茯苓白朮を加え、以て小便を利し、留飲を行らすなり。是によりて之れを観るに、成氏の注する所の本に、去桂の二字なきや必なり。説は拙著の橘黄医談に詳らかなり」

大塚：桂枝去桂枝加茯苓白朮湯は昔から議論のある箇所でいろんな異論があるとこなんだよ。奥田先生はこのままでいいんだと言っているな。色々問題はあるけど。

条文をみるかぎり小柴胡湯を使いたいような腹症が書いてあるな。「心下満。微痛」だろう。私はこの処方を使ったことがないから何とも言えないけれどね。しかしこれは桂枝を去らなければ都合が悪いと思うけどね。私の傷寒論講義では認めているでしょう。先に進みましょう。

桂枝去芍薬加麻黄附子細辛湯

方極文：「桂枝去芍薬湯と、麻黄附子細辛湯の、二方の證相合する者を治す」

「桂枝、生姜各三両、大棗十二枚（各六分）甘草、麻黄、細辛各二両（四分）附子一枚（二分）

右七味。水七升を以て、麻黄を煮て、上沫を去り、諸薬を入れ、煮て二升を取り、分温三服す。（水二合を以て、煮て六勺を取る）当に汗出るべし。虫の皮中を行くが如くなれば、即ち癒える」

第一条「気分。心下堅く、大きさ盤の如し。邊旋杯の如く、水を飲まんと作す所」

按語：「為則按ずるに、證具わらずなり。この方は桂枝去芍薬湯と、麻黄附子細辛湯を合わすなり。證は当に二方の下に於て求めるべし。薬徴に辨あり」

大塚：この「気分」は金匱要略の桂枝去芍薬加麻黄附子細辛湯のところで解説がついている。中将湯ビルで気分についてやらなかった？やっただろう。陰の気と陽の気がばらばらになって離れ離れになった状態を調和させる働きが桂枝去芍薬加麻黄附子細辛湯にはあると言われているんだ。

吉本：この前の中将湯ビルで桂枝去芍薬加麻黄附子細辛湯の条文の中での「虫の皮中を行くが如し」というところで、この処方を服用して虫が皮膚の中を這うような感じがすれば治るんだと大塚先生は言われました。しかし相見先生だったと思いますが皮膚の中を虫が這うような時にこの処方を服用するんだというようなことを言われたと思うのですがどちらがよいのでしょう？

大塚：この条文からではそうとは取れないんだがな～。相見君はね「気分」の意味をね、精神的なショックがあったりね、心配事があったり腹が立ったりして何か感動があった後から起こる病気だとしてるんだよ。腰痛だって「気分」からということで桂枝去芍薬加麻黄附子細辛湯を使うことがあるんだ。そうであれば必ずしも腹が張っていなくても使えると言っているんだ。この前も京都の東洋医学会で清心蓮子飲の話しをしたけれど「清心蓮子飲は患者の精神的な動揺によって小便がうまく出ない時に使う」と言っていた。別に膀胱に問題がなくてもいいと言っていたんだ。「清心」というのはそんな意味なんだと勝手なことを言っていた。清心蓮子飲は患者さんの精神状態の動揺から起こってくる膀胱炎症状に使えば必ず治ると言う。ただ桂枝去芍薬湯は「胸満」という症状があるからここでの「心下堅く、大きさ盤の如し」というのはわかるよね。けれど麻黄附子細辛湯の説明はここではつかないわな～。何で入っているか？麻黄附子細辛湯は水飲を去る。麻黄も附子も細辛も水を去る働きがあるから。欄外にいこう。

○「気分以下の十六字は、此れ枳実朮湯症なり。医宗金鑑に、以て衍文と為す。是なり。且つ気分の二字は仲景の口気に似ず。今傍例により之れを試すに、上衝頭痛、発熱喘咳、身体疼痛、悪寒の甚だしき者、之れを主さどる。子炳の気分血分の論は、含糊決せずして、且つ薬徴の文義を解せず。謾いて謬妄伝会の説と為す。無用の弁と謂うべし。

○老人秋冬の交毎に、痰飲咳嗽、胸背脇腹攣痛し、悪寒する者あり。この方に宜し。南呂丸を兼用す。

大塚：金匱要略にここの条文によく似た条文が枳朮湯のところで見られるんだ。ただ枳朮湯では気分という字が抜けているんだ。枳朮湯では桂枝去芍薬加麻黄附子細辛湯のように陰陽の気が分離するんではなくてただ心下に水が停滞して腹が張るのが目標になるんだ。

枳朮湯に人参とか茯苓とか生姜が入ってくると茯苓飲になってくるんだ。子炳とは類聚方集覧を書いた人だ。その子炳が「含糊」とあるから口に糊を含んだように何を言っているかわからないというわけだ。そして薬徴の文義を理解していないと。

老人が季節の変わる時に咳をすることが実際にあるけれど、これは慢性気管支炎ではなくて風邪が抜け切らない時に咳だけが残って一月も二月も続くことがあるんだ。体が弱い人で咳が出たり老人の急性気管支炎に使う処方です。少し小青龍湯に似ているでしょう。芍薬と附子の代わりに半夏と五味子が入れば小青龍湯だもんな。この処方は浅田の方函の中に仙台の工藤キュウキョウ？という医者が「心下堅く、大盤の如し」というところから友人が乳癌に使ったり肺結核のひどいのにこの処方を使っているんだ。どうしてこの処方を使うのか質問したところ、金匱要略のこの処方の掲載されている「気分」の解説のところで「大気一転云々」とあって、この処方は陰陽の気が分離した状態の時に大気を一転させてどんな病気も治すことが出来るからだと答えた。そのように工藤が書いていたので私も使ってみたけれど一向に効かなかった。バンチ病で脾臓が腫れて腹水があるのに使って水がはやく取れたことはある。いろんなことをやってこじれた病気に効くことはあるらしい。

桂枝去芍薬加皂莢湯

方極文：「桂枝去芍薬湯証にして、而して濁唾涎沫を吐す者」

「桂枝去芍薬湯方内において、皂莢二枚を加える。

桂枝、生姜、大棗（各七分五釐）甘草、皂莢（各五分）右五味。煮ること桂枝湯の如きにす」

第一条：「肺＿。涎沫を吐す」

○「皂莢は、猪牙と称するものを用いるべし。千金に、二枚を二両に作る。今之れに従う」

○「咳する者は、おおむね上気胸満す。桂枝去芍薬湯は以て上気胸満を治し、更に皂莢を加えて、以て涎沫を駆するなり」

○肺＿とは、咳して寒熱し、脈数にして、濁唾涎沫を吐す。或は口燥き盗汗し、痰中に血のある者を謂う」

大塚：痰の多い気管支炎に使う処方です。皂莢とはサイカチの莢です。サイカチの莢はサポニンが多くて刺激が強く分量を間違うとよだれがたらたら出たりくしゃみが出たり鼻水が出たりして目も鼻もクシャクシャになってしまうんだ。他人にやると怒られるから自分

で試してみたらいい。皀莢丸で丸剤にする時にはさほどでもないが煎じて服用したら大変なんだ。肺＿は金匱要略に出てくるけど今の肺結核とは少し違うようだね。欄外に説明している通りに咳があって膿のようなものを吐くんだったら肺＿はむしろ肺癰に属するだろうけどね。今日の肺壊疽ね。口が乾いて寝汗が出たり痰に血が混じるのは肺結核のようです。しかし桂枝去芍薬皀莢湯を肺結核に使ったらえらいことになっちゃうな。

桂枝加龍骨牡蠣湯

方極文：「桂枝湯証にして、而して胸腹に動ある者を治す」

「桂枝湯方内において、龍骨牡蠣各三両を加える。

　桂枝、芍薬、大棗、生姜、龍骨、牡蠣（各四分五釐）甘草（三分）

右七味。煮ること桂枝湯の如くにす。」

第一条：「夫れ失精家。小腹弦急し、陰頭寒く、目眩し髪落ち、脈は極めて虚、＿遅。清穀亡血失精と為す。脈諸＿動微緊を得て、男子は失精し、女子は夢に交わる」

按語：「為則按ずるに、当に胸腹の動の證有るべし」

大塚：第一条の条文で「清穀亡血失精と為す」というふうに吉益東洞先生は読んでいるけれど「為清穀亡血。失精脈～」と読んだ方がいいんだ。「失精脈～」以下は失精の脈を説明する為に後人があとから付け足したのだろうと思われれる。最初に「失精家」とあるから意味としては、平生精を浪費してして起きたところの病気は下腹がひきつって、腹直筋が下の方で堅くなって、「陰頭寒く」とは陰部が冷えるように感じて、めまいがしたり髪が抜けてくる。そして脈を診ると「＿動微緊」だから葱の切り口のように中が中空で力のない脈であると。外は固いが中は弾力のない虚労の脈ということね。「動」ですから動きは速いのね。そんな脈で男は「失精」とあるから精力を失った状態。女子は「「夢に交わる」とあるから夢で男と交わるということね。性的ノイローゼでしょうね。この桂枝加龍骨牡蠣湯はひじょうによく効く薬で女より男に使う機会が多い。以前女子の「夢に交わる」の例を大阪の西山英雄君が漢方医学雑誌に掲載したことがある。ある未亡人で男の子供が一人あるんだが相談に来て『夜寝ていると主人か誰かわからないんだが男の人が現れてその人と抱き合っている夢を毎夜みる』と恥ずかしそうに言ったというわけ。びっくりして起きたらとなりに男の子供が寝ているんで恥ずかしくて何とか治したい。そこで西山君が桂枝加龍骨牡蠣湯を出したところひじょうによく効いたと『漢方の臨床』に書いてある。男では早漏だの夢精だの性欲が減退する場合にひじょうによく効きます。去年だったか患者で結婚したけれど全然夫婦生活が出来ないんだって。それで奥さんが逃げ帰っちゃっ

て相談に来たんだ。それで桂枝加龍骨牡蠣湯を出したんだ。そしたら一月くらいして『お陰様でよくなりました。女房も帰ってきました』と電話があったので『そりゃあよかったな～』て言ったんだ。それからねしばらくして『今度は強くなりすぎてどうにもならん』と電話があったので『強くなりすぎるのも病気なんだ』と答えておいた。強くなりすぎるのも病気だからそのうち体がよくなればちょうどよくなるわけね。それっきり電話がかかってこないので治ったんだろう。ただね、この桂枝加龍骨牡蠣湯を服用するとよく下痢をするんだよ。そんな時には半夏瀉心湯を一日毎に交代で飲むんだよ。今までこの処方で下痢をするというのが２～３例ある。

吉本：柴胡加龍骨牡蠣湯で下痢をするという人がありますか？

大塚：そりゃあある。柴胡加龍骨牡蠣湯は大黄が入っているから。しかし陰萎とか早漏とかは柴胡加龍骨牡蠣湯より桂枝加龍骨牡蠣湯の方をよく使う。それから髪が抜けるのにもよく効くよ。円形脱毛症ではなくて全体に髪が抜けやすくなるのにいい。男でも女でもいい。龍骨、牡蠣がカルシウムが多いからそれも関係があるかも知れないけど。抜け毛が多いというのにもいい。必ずしも大事ではないが腹症だけれど腹直筋が攣急していることが多い。臍の横で動悸が感じられる者も多いが動悸がなくても使って悪いことはない。

それから受験生などで頭を使っている時にはずいぶんいいね。鎌倉の患者で息子が東大の医学部を受験するという。どうも体のことが心配でというのでこの薬をあげたら調子がよくて浪人せずに医学部に入学したんだ。頭を酷使する状態にいいんだ。本人はコーヒーに色が似ておいしいと言って飲むんだと言っていた。欄外にいこう。

○「稟性薄弱の人。色欲過多なれば、則ち血精減耗し、身体は羸瘦し、面に血色なく、身に常に微熱あり。四肢倦怠し、唇口は乾燥して、小腹弦急し、胸腹の動甚だしく、その極まるや死せずして何をか待たんや。長くこの方を服し、厳に閨房を慎んで、保嗇調摂すれば、則ち以て骨に肉し生を回すべし」

大塚：生まれつきあまり丈夫でない人が色欲を使い過ぎると血と精が減って体が痩せて顔に血色がなくなる。身に微熱あるというのは体温計で測って熱があるというわけではなくて、うんと疲れた時に体がほてったり足が灼けるように感じたりすることで体温が高くなるということではない。手足がだるく唇が乾燥して下腹が引きつれる。胸腹の動悸が劇しくなるのは死ぬしかないのだと。長くこの処方を服用して、房事をつつしんで、よく寝て体調を調えるようにすれば死なないですむんだとこうゆうことね。

○「婦人にて心気鬱結し、胸腹の動甚だしく、寒熱交作して、経行常に期を愆ち、多夢に

して驚きてきし、鬼交漏精し、身体漸として羸瘦につき、その状恰かも労＿に似る。＿婦室女、情欲妄動するに遂げられざる者、多くこの症あり。この方に宜し」

大塚：婦人でいつも気分が塞いで胸に動悸があって、寒熱が交代に来て、生理がきちっと来ないで不順で、夢をよく見ると。驚きやすく、先ほどの鬼と交わると同じく変な夢を見て体が痩せてくると。肺結核のようになるんだと。＿婦とは後家さん。室女というのは年をとっても嫁にいかない娘さん。情欲があっても遂げられない者にこうゆう症状が出やすいんだと。この処方がいいという。

○「この方、及び桂枝去芍薬加蜀漆龍骨牡蠣湯、桂枝甘草龍骨牡蠣湯、三方、いわゆる癇家にて、上衝眩運耳鳴りして、胸腹の動悸、夢寐驚起し、精神恍惚、或は故なくして悲しみ愁う者、症に随って選び用うれば、各効あり。若し心下痞し、大便難なる者は、瀉心湯を兼用すべし。また火傷湯澆、大熱口渇して、煩躁悶乱し、死せんと欲する者、及び灸後発熱して煩冤の者も、亦三方を選び用いる。或は瀉心湯、黄連解毒湯等を兼用す」

大塚：「癇家」とは癲癇も含むがそれ以外に神経過敏になっている人という意味。「湯澆」とはお湯でゆであげられてのぼせるという意味。灸の後の発熱にもいいと言っているね。

桂枝去芍薬加蜀漆龍骨牡蠣湯

方極文：「桂枝去芍薬湯證にして、而して胸腹の動劇しき者を治す」

「桂枝三両生姜三両大棗十二枚蜀漆三両（各四分五釐）甘草二両（三分）牡蠣五両（七分五釐）龍骨四両（六分）

右七味。水一斗二升を以て、先ず蜀漆を煮て、二升を減じ、諸薬を入れ、煮て三升を取る。滓を去り、一升を温服す。（水一合四勺を以て煮て六勺を取る）」

第一条：「傷寒。脈浮。医火を以て之れを迫劫すれば、亡陽すれば必ず驚狂す。起臥すること安かざる者」

第二条：「火邪の者」

按語：「為則按ずるに、当に胸腹の動ありて、而して衝逆の證あるべし」

大塚：この処方は桂枝去芍薬湯に蜀漆と龍骨と牡蠣を加えた処方ですね。第一条の意味は傷寒に罹って脈が浮の状態であるのに、医者が誤って火で患者をせめた為にとある。火とは今でいうと灸頭鍼のような療法や、カイロのようなもので体を温めて治療する方法でしょう。そうすることで発汗して体の陽気を失い驚き狂うというわけ。結果的に神経過敏になって起きたり寝たりがうまくいかない状態になる。第二条の「火邪」とは火傷のような

もので、風呂で長くつかり過ぎてのぼせたようになる者なども含む。要するに火が原因で起こる色々な精神的、或は外傷的な症状を「火邪」と言いこの処方の適応症に当てているんだ。この処方は蜀漆を入れなくてもよく効きます。火傷をした時にはすぐ飲まして紫雲膏をつけておくと一時間もしないうちに水ぶくれがひいてよくなるんだ。それから風呂で長湯をして酔った人にもよく効きます。

桂枝甘草龍骨牡蠣湯

方極文：「胸腹の動ありて、急迫する者を治す」

「桂枝一両（一銭二分）甘草、龍骨、牡蠣、各二両（六分）

右四味。水五升を以て、煮て二升半を取り、滓を去り、八合を温服す。（水一合二勺を以て、煮て六勺を取る）日に三服す」

第一条：「火逆之れを下し、焼鍼によりて煩躁する者」

○「この方は本桂枝甘草湯より出ず。桂枝は僅僅一両なり。疑うべし。故に余は常に四両を用いる。学者之れを試せよ」

○「證具わらざるなり。疑うらくは脱誤あらん。且つ火逆豈必ず之れを下すや。よろしく症を審かにして之れを治すべし」

大塚：ここの意味はよくわかりません。「火逆」を「下す」と言ったってわからないし、「之れを下す」の意味もわかりません。私の経験では神経性の心悸亢進症やバセドウ氏病で動悸がするけれど地黄が飲めない人、胃腸が弱い人には桂枝甘草龍骨牡蠣湯に半夏厚朴湯を合方にして出すといいんです。炙甘草湯を使えない人はたいてい胃腸が弱いから。胃腸が弱くちょっとしたことですぐ動悸がしたりむかむかしたり、地黄を使うと下痢をしたり食欲がなくなる人にいいんだ。炙甘草湯が使えないバセドウ氏病に桂枝甘草龍骨牡蠣湯に半夏厚朴湯の合方がいい。それに神経性の心悸亢進症に使うんだ。質問はあるか。

伊藤：この前、鍼灸学校の友人なんですが便秘をして困るんだと相談されました。風邪をひいて新薬をもらって服用していたらしいんですがそれから便秘がひどくなったらしく、潤腸湯がいいんではないかと言っておいたところ、その通りに服用したらしいんですが尿閉をおこしてしまいまして困っているのですが？

大塚：おかしいな～。前立腺肥大症があったんじゃないか？どんな体格の人？

伊藤：やせている人なんですがそれから導尿しまして今は何とかよくなったらしいんですけど。

大塚：おかしいな。潤腸湯でそんなになることはないと思うんだけどな。その薬のせいで

はなくても薬を服用した後で何かが起きると薬のせいにされるからな。前に社会党の代議士で荻窪に住んでいたんだが、鍼灸家で山田という人がいてその人の紹介で往診してくれと頼まれて行ってみると胃癌の末期なんだよね。もう外からもわかるくらい大きいんだよね。食欲もないし便所にも一人で行けないくらいひどいんだよ。それであたりさわりないようにと思って六君子湯なら大丈夫だろうと思って出したんだよ。それがね一服飲んだら血を吐いて死んじゃったんだよ。漢方薬を服用して死んでしまったということになったんだよ。我々に言わせればたまたまそうなる前に六君子湯を服用しただけでそんな強い薬とは思わないが弁解する余地はないよ。事実服用してすぐに血を吐いて死んじゃってるんだから。水を飲んでも死んでいたかもわからないんだがそんなことを言ってもはじまらないんだ。原南陽はうんと重い病人でいつ死ぬかわからない患者に出す不及飲という処方を書いているよ。飲むに及ばずという意味だ。面白いな。しかし患者の家族はそうは思わないから。それに最近は訴えられるからな。裁判になったら勝てっこないから。だからあんたたちも薬剤師だから責任を問われるから重い病気には気をつけなくっちぁ。変な気をおこして重い病人を治して得意になろうと思っていたらえらい目にあうよ。

大野：34才の女性でメニュエル症候群と診断されたんですけど足から肩から右だけが痛く凝るらしいんです。桂枝加朮附湯なんかではどうなんでしょうか？

大塚：メニュエル症候群とは眩暈と吐き気と耳鳴りがあるんだ。この頃の医者の中にはね眩暈だけでもメニュエル症候群と診断するんだ。そんな馬鹿なことはない。耳の三半規管の異常だからね。休つきはどう。

大野：虚証で小腹急結があるそうです。

大塚：便秘するの？

大野：二日に一度くらいだそうです。

大塚：メンスは？

大野：２８日毎にあるそうです。

大塚：メニュエルは何時からおこっているの？

大野：三年前からだそうです。入院していたことがあるそうです。右だけが痛くてと言っていました。

大塚：湯本先生は右は水毒の場合が多いと言っていたな。血毒からくる場合は左だと言っていた。しかし長いこと観察してみたけどその通りでもないようだ。どうも信用出来ないな～。ただ肝臓が悪いと右に症状が出やすいよね。何だろうね～。見当つかんな。

どうも年のせいかな患者さんを診ていても３時頃から声が出なくなる。葛根湯を服用するとちょっとよくなるんだ。今日は講義するんで朝から葛根湯を飲んでいたけどだめだ。

伊藤：腎性の高血圧患者の七物降下湯と八味丸との使い分けを教えていただけますか？

大塚：足に浮腫があるとか夜に小便が近いとか、腹症では下腹部に正中芯があったり軟弱であったりすれば八味丸を使うことが出来るんだ。そうでない場合には七物降下湯でよいんだ。ただ八味丸を使う時に私は釣藤鈎と黄柏をよく加えます。でも腎臓性の高血圧は難しいね。

吉本：『橘黄医談』という本のことが桂枝去桂加茯苓朮湯の欄外に出てきます。これについて何か教えていただけますか？

大塚：橘黄医談には二種類の本があるんだ。一つは山本鹿州（貞惇）の著したもの。それからこの尾台榕堂の著したものだが尾台先生のは写本でね。尾台先生の橘黄医談は面白くないんだ。自分が読んだ本のことが書いてあるんだが漢文で返り点がついていないのでとても読みにくい。山本鹿州の橘黄医談は仮名交じりの読みやすい文章で版にもなっているんだ。拓殖大学の連中が何時かガリ版刷りで出版したけどね。鹿州の家は茨城県の霞ケ浦の近くにあってね。矢数さんと訪ねて行ったことがあるんだ。わらぶきの家だったがもう古くてね人は住めないんだけど庭に大きな山本鹿州の碑が建っていてね。鹿州には孫がいて東京で建築業をしていてうちにも来たことがあるよ。鹿州の橘黄医談は面白いことが書いてあるんだ。脈なし病のことを書いたり小児まひのことなどにも触れているんだ。いい本だよ。

雑談①・・葛根湯のことだがうちの橋本が風邪をひいて熱が四十度も出てね、それで下痢をするんだよ。「何を飲んだんだ」と聞いたら「半夏瀉心湯を飲みました」と言うんだ。それでも三日くらい下痢が止まらないんだ。診てみると筋肉がコリコリに凝っててね。それで腰も痛いと言うから葛根湯をやったら一服で治っちゃった。それはね急性の場合だ。

（桂枝去桂加茯苓朮湯・十五頁類聚方条文からＮＯ・２・Ｂ面は後で編集）

桂枝麻黄各半湯と桂枝二麻黄一湯との区別をどこでするかというと簡単にはできんけど。ただ明治時代までは瘧といってマラリアのような病状がよくあったんだ。どうもそのような場合にこれらの処方はよく使われたらしいんだ。「瘧の如し」と書いてあるのだからマラリアでなくてもいいわけですが症状としては熱が出て寒けがひどくしてね、熱が「日に再発する者」とあるから一日に二回も出る。桂枝湯では汗が出にくいから麻黄湯を加えて汗を出すという考えだね。この場合は脈が「洪大」となっているが洪大の脈というのは虚の脈です。若し洪大で力のある脈であれば白虎湯などを使うわけだけれど、ここで書いてあるように桂枝湯を使うんであれば洪大で力のない脈をしているだろう。洪大で口渇があれば白虎加人参湯だろう。尾台榕堂先生は欄外にここは間違いだと言っているけれど「桂枝湯を服して、大いに汗出でて後」となれば白虎加人参湯の条文が混入したものと考えられるが「後」の字がない限り桂枝湯の症が依然として残っていると考えた方がいい。

何度も言っているが「～した後」という場合は症が変わるけれど「後」の字がないのであれば症が変わらないと解釈した方がいいんだ。

○「中風傷寒、棄置として日を渉り、或は発汗の後、邪気なお纏繞して去らず、発熱悪寒し、咳嗽し或は喝する者、已下の三方を選び用いるべし。瘧疾にて、熱多く寒少なく、肢体隋痛する者は、五七発の後、桂枝二麻黄一湯、桂枝麻黄各半湯を選んで、その初時に先んじて、温服して大いに汗を発すれば、則ち一汗にして癒える。若し喝する者は、桂枝二越婢一湯によろし。三方は皆截瘧の良方なり。

○「桂枝湯を服し、以下の十八字は、白虎加人参湯の条文が、錯乱して混入するなり。説は桂枝湯標に見える」

「棄置」という意味は『捨て置いて』という意味だから医者にかからないでという意味だ。ここでは治療しないでほっておくとなっているけど治療しても治らないことも含まないといけないね。傷寒や中風にかかって熱のある場合に治療しないで「日を渉り」とあるから何日もほっていた場合に、医者が葛根湯や麻黄湯で汗を出して後に、邪気がまとわりついて治らないと。寒けがして熱がしてとあるからまだ邪が表に残っているわけだ。咳が出たり喉が渇く者は桂枝二麻黄一湯、桂枝麻黄各半湯、桂枝二越婢一湯を選んで使えと。

マラリアはだいたい熱の出る時間が決まっているから、その熱が出そうになる前に服用させろというわけだ。薬を服して暖かくして汗を出せば治ると。今私たちがこの処方を使う

のは感冒のこじれた場合で、葛根湯や麻黄湯を使った後で小柴胡湯かなと思う時に桂枝二麻黄一湯のことがあるんだ。それと体の弱い人の中には初めから桂枝二麻黄一湯や桂枝麻黄各半湯という場合があるんだ。麻黄湯を使うには薬が強過ぎるし桂枝湯にしては力が弱いかなと思う時に使うんだが、その判断はひじょうに難しいんだ。我々が漢方をやり始めた当時は桂枝二麻黄一湯や桂枝麻黄各半湯を使う人を偉いな～と感心したりしたもんだ。昔花園町に多々良という男が漢方専門でやっておったが、２～３年前に長崎で死んだけどな。多々良という男はなんにも漢方のことを知らないんだ。山梔子のことを『ほうし』と読むくらいなんだ。その男がね風邪の患者に桂枝麻黄各半湯を使ったといって荒木性次君がびっくりしておった。要するに桂枝湯や葛根湯を使うところにそのような難しそうな処方を使ったら、いかにも上手に思うだけでたいしたことはないんだよ。見栄だよな。人を驚かせばいいんだよ。それに根拠があるかどうか。それが問題だ。

桂枝二越婢一湯

方極文：「桂枝湯証多く、越婢湯証少なき者を治す」

「桂枝、芍薬、甘草各十八銖（四分五釐）生姜一両三銖（七分）大棗四枚（六分）

麻黄十八銖（四分五釐）石膏二十四銖（六分）

右七味。＿咀し、水五升を以て、麻黄を煮て一二沸し、上沫を去り、諸薬を入れ、煮て二升を取り、滓を去り、一升を温服する。（一合五勺を煮て六勺を取る）」

第一条「太陽病。発熱悪寒し、熱多く寒少なし。脈微弱の者は、これ陽無きなり。発汗するべからず」

第一条の傷寒論の条文では「桂枝二麻黄一湯に宜し」最後の読みが『よろし』になっているでしょう。「宜し」という場合と「与える」という場合と「主さどる」という場合は違うんだと理屈を言っている人がいるが、必ずしも厳密に区別しなくてもいいと思う。「主さどる」という場合にはその処方以外は使えない場合がそうであって「宜し」というのは嫌疑の方で、この処方を使った後で違う処方を使うこともあるという時に使うとされている。絶対という意味ではない時に使うと言われるんだ。でもそんなに厳密に言わなくてもいいと思うし、まあ「主さどる」より意味が強くないということだと思えばいい。

ここの条文で「これ陽無きなり。発汗するべからず」という所は後人が前の文章の説明の為につけた注釈だから。「太陽病～脈微弱なる者は、桂枝二越婢一湯に宜し」と続けばいいんだ。だから全体の意味は熱があって悪寒があるが、悪寒は少ないと。脈を診ると弱いので、この場合は強く発汗してはいけないので桂枝湯を多くして越婢湯を少なくしてある

んだね。石膏が入っているから口渇があると言われるがこの場合の口渇は少ないんだ。口渇はあまり目標にしなくてもいい。それに桂枝湯が二で麻黄湯が一の割合だから発汗する力も弱いわけだ。欄外にいこう。

○「風湿、痛風の、初起にて寒熱休作し、肢体疼重し、或は攣痛し、或は走注し腫起する者は、この方を以て汗を発し、後に加朮附湯を与えるべし。応鐘散、____丸等を兼用する」

風湿というのは神経痛のような病気ですね。湿ですから水毒があるような人で外邪の侵入によって痛みが起こるような病気。雨が降る前に痛みがひどくなるようなことがあるね。痛風は今日の痛風ではなくて痛みが風のようにあちこち動き回る多発性関節リウマチのような病気です。今の痛風は痛みが動き回るということはない。だからここは神経痛やリウマチと考えておけばいい。その初期に悪寒と発熱があって、肢体とは体のことで体が重く痛くて、あるいは関節などが引きつれて痛い、「走注し腫起す」だから痛みが走り回って腫れるわけだ。神経痛やリウマチで足が腫れて痛い場合はこの処方で汗を発して後に桂枝加朮附湯を与えると。応鐘散、____丸というのは東洞流の兼用丸散方だからね。ここで加附湯というのを桂枝二越婢一湯加朮附湯と解釈する人がいる。そうすると桂枝加朮附湯に越婢湯を合方した形になるでしょう。

吉本：大塚先生の傷寒論解説の中で越婢湯に関する条文は金匱要略にしかないのに傷寒論に桂枝二越婢一湯が出てくることは越婢湯の条文が傷寒論から漏れたものだろうと書かれてあります。そして越婢湯は大青龍湯に近い処方だと書かれていますがそのことについて説明お願いできますか？

大塚：うん。大青龍湯に似ているけれど越婢湯には桂枝が入っていないんだよ。大青龍湯という処方は桂枝と麻黄それに杏仁が入っているから発汗作用が強いんだよね。しかし越婢湯は麻黄は入っているが桂枝がないから利尿作用はあっても発汗する作用は弱いんだ。ここでは桂枝二越婢一湯ですから桂枝が入ってくる。しかし麻黄が少ないから発汗作用はそんなに強くはない。越婢湯は裏に熱がある状態だから石膏が入る。大青龍湯は表にも裏にも熱邪がある状態だね。表に邪がある時には麻黄湯でいいけれど中に熱がある時は麻黄湯で表の邪を去っただけでは熱が下がらないんだ。そこで石膏を加えて表の熱と裏の熱を一緒にさばくのが大青龍湯なんだ。越婢湯の場合は発汗しなくてもむしろ利尿させてことをすますわけね。だから越婢加朮湯なんかが出てくるわけね。

千葉の伊藤君や藤平君はリウマチには越婢湯に桂枝加朮附湯の合方をよく使うな。

桂枝麻黄各半湯

方極文：「桂枝湯麻黄湯の二方の證相半ばなる者を治す」

「桂枝一両十六銖（六分五釐）芍薬、生姜、甘草、麻黄各一両、大棗四枚（各四分）

杏仁二十四個（五分）

右七味。水五升を以て、先ず麻黄を煮ること一二沸し、上沫を去り、諸薬を入れ、煮て一升八合を取り、滓を去り、六合を温服す（水一合六勺を以て、煮て六勺を取る）」

第一条：「太陽病。之れを得て八九日。瘧状の如く、発熱悪寒し、熱多く寒少なし。その人嘔せず、清便自ら可ならんと欲す。一日二三度発し、脈微緩の者、癒えんと欲するとなす。脈微にして而して悪寒する者は、之れ陰陽倶に虚し、更に発汗更に下し更に吐すべからざるなり。面色反って熱色ある者は、未だ解せざるを欲せずなり。それ小汗出ること得るを能わざるを以て、身必ず痒ゆし」

この処方は桂枝湯と麻黄湯が半々に入っているわけね。「太陽病。之れを得て」という表現が時々出てくるよね。少陰病のところにも「之れを得て」という表現がよく使ってある。これは緩慢に症状が進行して何時から悪くなったかはっきりしない時にそのような表現をするんだよ。特に少陰病は自覚症状がひじょうに少ない病気だから「之れを得て」という表現をよくする。太陽病でもはっきりした発病の時がわからない場合にはこのような書き方をする。ここでは太陽病でも症状があまり劇しくなく、そして熱が出たり寒けがする場合でしょう。ちょうどマラリアのようで熱が出て寒けがするが寒けは少ない。そのような場合にしだいに少陽病に移行することがあるんだが「その人嘔せず」とあるからまだ小陽病に入ってないことを示してある。傷寒論・金匱要略には「嘔せず」という書き方がよく出てくるが小陽病にまだなっていないことをいう為に使われるんだ。白虎湯の証、すなわち陽明病の証になっていない時には「喝せず」という書き方がされることがあるのと同じだね。ここの条文では「太陽病」で八九日にもなっているわけで小柴胡湯の症状に似ているけれどまだ小柴胡湯を使う状態ではないということを書いてあるんだ。「清便」とあるのは大便のことをさすけれど「清」は「＿」と同じで「かわや」とか「便所」のことだよね。便秘すれば陽明病になるけれど「清便自ら可ならんと欲す」とあるから大便も普通に出るわけだ。少陽病でも陽明病でもないというわけだね。熱の出る発作が一日２～３度あると。緩の脈というのは病気が緩慢で劇しくない時の脈だから。「微緩」とあるのはもう病症が衰えてきた時の脈なんだ。治りかけている時なんだと。

吉本：ここでは薬を服用した後で脈が微緩なんでしょうか？

大塚：まあちょっと待ってや。先まで読んでからにするから。「脈が微で悪寒する者は、陰陽が虚しているから、更に発汗したり下したり吐かしたりしてはいけない」とある。「顔色が赤くなるはずはないけれど顔が赤くて熱があるように見える者はまだ治る気配はない。少し汗が出ようとして出ないから体が痒くなるんだ」と書いてあってそのような場合には桂枝麻黄各半湯が主さどると続くんだろう。それで先ほどの質問の桂枝麻黄各半湯を服用して脈が微緩になって癒えるということではないと思う。ただ状況から脈が微で緩になってきたら自然と治るようになるわけ。その後の「脈微で悪寒する者～発汗し更に下し更に吐すべからず」とあるのも陰証になってきているんだから麻黄を与えるべきでない。ここで桂枝麻黄各半湯を使う目標は『ちょっと顔が赤くて汗が出ていなくて体が痒い』ということです。蕁麻疹や湿疹の初期に使うわけよね。葛根湯を使いたい時で体が弱かったり脈が弱い時に使えるわけね。欄外読んでごらん。

○「痘瘡、熱気灼くが如く、表鬱して見点し難く、或は見点稠密し、風疹交出し、或は痘起脹せず、喘咳して喉の痛き者は、この湯に宜し」

○「自ら可ならんと欲すとは、不可発汗篇、脈経に、並びに続いて自ら可なりに作る。是なり。

○「以上の二方の例によって、桂枝麻黄各半湯に宜しの八字は、まさに癒えんと欲すとなすの下にあるべし」

○「已に瘡状の如く、発熱悪寒し、熱多く寒少なし云々は、癒えんと欲すとなすなりと云う。而してまた面色反って熱色ある者は、未だ解せざるを欲せず云々と云う。前後は矛盾しよろしく刪去すべし」

痘瘡とは天然痘のことで「灼くが如し」とあるから熱が高いわけよ。天然痘とか麻疹などは発疹が体の表面に出てくるとよくなるけど、中にこもってしまうと重傷になるわけ。

「表鬱」とはそのような状態を説明しているんだ。天然痘はおできになって膿が出来るようになればいいけど、体の弱い人に限って表に出にくいわけね。「見点稠密」というのは発疹がまばらでなくてたくさん出ることだ。「風疹」というのは三日麻疹のことだ。

「風疹交出し」とあるが天然痘と三日麻疹が一緒におこるかどうかわからないが、交じって出ると。その場合に桂枝麻黄各半湯がいいと。また咳が出たり喉が痛い時にいいんだと書いてある。表が弱くて天然痘とか麻疹が表に出てきにくい時にということだが、今時、天然痘はないから麻疹の時に使えるんじゃないかと思う。

「不可発汗篇」は傷寒論の終わりの方にあるよね。それと脈経にあると。

「桂枝麻黄各半湯に宜しの八字は、まさに癒えんと欲すとなすの下にあるべし」とは先ほど言ったとおり私の意見とは違うけれど。

その後の欄外で「已に瘧状の～前後は矛盾しよろしく刪去すべし」とあるが私はおしまいの条文が大切だと思うので削り去らないほうがいいと思う。最後のほうを削り去っては意味がとれなくなると思うんだが尾台先生はこのような意見を述べている。

小建中湯

方極文：「裏急し、腹皮拘急し、及び急痛する者を治す」

「桂枝、生姜各三両、大棗十二枚（各四分五釐）甘草三両（三分）芍薬六両（九分）膠飴一升（四銭）

右六味。水七升を以て、煮て三升を取り、滓を去り、膠飴を入れ、更に微火に上げて、消し解かし、一升を温服する。（水一合四勺を以て、煮て六勺を取り、滓を去り、膠飴を入れて消しせしめ服す）日に三服す。嘔家は建中湯を用うべからず。甘きを以ての故なり」

第一条：「傷寒。陽脈渋、陰脈弦。法當に腹中急痛する者は、先ず小建中湯を与える。癒えざる者は、小柴胡湯を与え之れを主さどる」

第二条：「傷寒二三日、心中悸し而して煩する者」

第三条：「虚労。裏急悸衄し、腹中痛み、夢に失精し、四肢＿痛し、手足煩熱して、咽乾口燥」

第四条：「男子。黄、小便自利」

第五条：「婦人。腹中痛」

按語；「為則按ずるに、まさに腹中狗急の証あるべし。その方は芍薬甘草湯に類するなり」

「裏急し、腹皮拘急し」とは腹直筋が引きつれることだね。しかし腹にガスがたまって張った感じになるのも「裏急」に当てはめていいわけで腹直筋にこだわることはない。攣れて痛みがある状態であればいいんだ。小建中湯は脾胃で言えば脾の虚の状態で人参湯は胃の虚に相当する。臓腑の関係からすれば脾は陰で胃は陽に相当する。だから小建中湯を使う場合は太陰病の状態なんだ。小建中湯の特徴としては飴が入るということと芍薬の量が多いことだ。飴は煎じる途中で入れて解かすということが書いてある。「嘔家」というの慢性的に吐き気のある人のことを指す。「喘家」とは喘息もちや咳を常にする人のことを指すのと同じにね。小建中湯は甘いからという意味だがあまり厳密に考える必要はない。「陽脈渋」とは軽く抑えてみて引っかかるような脈という意味。「陰脈弦」とは強く抑え

て弓の張った弦を抑えるような感触があることをいう。また陽脈は寸口の脈で陰脈は尺脈という説がある。だけどもこれでははっきりわからないから軽く抑えてみるのが陽脈、深く抑える脈を陰脈にしたほうが分かりやすい。「法當に～」と続くところは後人が筆を加えたところと解釈していい。康平傷寒論では「陰脈弦」の後に欠字が二文字あるんだ。そこに「法當に腹中急痛すべし」という字が入るだろうと小さな字で書き込みがあるんだが本当にその言葉だったかどうかはわからないんだ。だから軽く脈を抑えてみて引っかかるような脈で、強く抑えるとつっ張っているような脈であって腹が引きつれて痛む者は先ず小建中湯を飲ましてみろというわけだ。それで治らない者は小柴胡湯を飲ませてみようという意味です。そうすると小建中湯と小柴胡湯の症が似ていることがわかるでしょう。似た症状があってどちらの処方を使っていいかわからない時には虚証に使う処方を先に使い実証の処方は後で使うということがここで書いてある。しかし奥田先生は逆で大柴胡湯を使うか小柴胡湯を使うか迷った時には大柴胡湯から使うように藤平君らに教えたらしい。しかし私はそうではなくて虚証の処方を使うべきところへ実証の処方を使うと、後で取り返しのつかなくなることがあるから初めは虚証の薬を使うべきだと思う。

吉本：第一条の「小建中湯を与えて、癒えざる者」とあります。一般的には癒えないのは「腹痛」だということになっていますが大塚先生の傷寒論解説の中には内藤希哲の説に従って癒えないのは「腹痛」ではなくて「傷寒」を指すんだと書かれてあります。その点を説明して頂けますか？

大塚：うん。そうゆう解釈の方法もあるんだ。しかしここで使われている「癒える」という字だけれども、意味としてはよくはなったけれどまだ完全に治っていない時にこの字を使っているようなんだ。あまり効かなかった時に使われる表現にもとれるんだ。だから先ほども言ったとおり「腹中急痛」が他の言葉だった可能性もあるんだ。問題なんだよ。

私たちの今までの経験では小建中湯の痛みのある場合は下痢はあまりなくてむしろ便秘の傾向があって、吐き気もなく腹が張って腹直筋が張ったりガスが溜ったりして腹が痛いと。脈は弱くて冷え性で顔色もよくないというところを目標にするんだ。虚証の太陰病の腹痛で下腹の方に痛みが来ることが多い。人参湯は上腹部に痛みが来ることが多いんだ。

第二条はひじょうに大事でね。体がうんと弱い人とか大病をした後で体力が回復していない人、或は肺結核をやった後の人で胸郭整形などをやった人は風邪をひいても葛根湯が使えないんだ。それはどうゆうことかと言うとそんな人は熱があることが苦しいというより動悸がして息することが苦しいとよく言うんだ。胸を切って肺が狭くなっているし体に力

がないから風邪をひいたらすぐ動悸がして息切れがする。そんな時には小建中湯を使わなければいけない風邪なんだ。このような人は葛根湯どころではなく桂枝湯でもだめなんだよ。子供でうんと虚弱な者や大人でも産後などで体が弱っている場合には麻黄の入っている処方は使えなくって小建中湯を使わなければいけないことがあるんだ。動悸と胸苦しさを訴える風邪であれば小建中湯を出しておれば安全だから。このことは大事だから覚えておかなければいかん。第二条に「傷寒二三日」とあるでしょう。だから風邪をひいてすぐ胸苦しさや動悸がする症状が出るんだね。

第三条で「悸衄」とつながっているけれど「悸。衄」に分けなければいけない。「悸」は「動悸」だし「衄」が鼻血だから。「夢に失精し」とは寝ていて精液が漏れるわけだ。「四肢＿痛」手足が痛く「手足煩熱」とは手足の裏がほてる感じをいう。冷たいものに触っておきたいとか蒲団から手足を出して寝るようなことを指すんだ。手足のほてりを訴える患者には小建中湯や補中益気湯を使わなければいけない虚弱な人もいるし地黄の入った八味丸の症の人にもいるんだ。地黄剤でほてりのある時には体はあまり衰えていないけれど小建中湯や補中益気湯の煩熱は虚証の場合がほとんどだ。「咽乾口燥」だから水を飲みたいわけではないのね。のどの奥が乾いてくるわけね。のどを湿らしたいという意味だね。ここは金匱要略の虚労篇に出てくるところです。

吉本：この前の大塚先生の金匱要略講話で三物黄芩湯が出てきましたね。その中でやはり手足のほてりに使うということをおっしゃいましたが関係があるのですか？

大塚：三物黄芩湯は地黄が入っているからね。地黄が入っている処方はよく煩熱がある。けど小建中湯で煩熱を訴える場合は体が弱っている虚証の場合だからね。地黄は使えないよ。地黄を使うとよけいにおかしくなる。第三条を見るかぎり虚労ということでは八味丸の症と似ているので小建中湯を出すところへ八味丸を出すとすごく悪くなることがあるんだ。夢精があったり手足がだるかったり手足の煩熱があったりすると僕だって八味丸を出すことがあるんだ。これは気をつけなければいけないんだ。ここでの鼻血は麻黄湯で治るような鼻血ではなくてしょっちゅう少ない出血だけど鼻血を出すことをいうんだ。子供に多い。風邪をひいて急に鼻血が出るのとは違って慢性的というか常習的というかそうゆう鼻血だ。親が『この子はすぐ鼻血を出します』という子供に小建中湯を使うんだ。

紫斑病という病気を知っているか？子供にも多いんだけれど紫斑病で鼻血を出す子がいる。それから紫斑病の患者は特に足に紫の斑が出来るんだ。虚証の患者には小建中湯を出せば紫斑病も治るし鼻血も出なくなる。小柴胡湯も子供によく使うけれど小建中湯も虚弱児

童によく使う。もう一つ間違いやすい処方に桂枝加竜骨牡蠣湯があるんだ。この処方も虚労に使い動悸がしたり夢に失精するようなことがあるんだ。子供のおねしょや昼間でも小便が漏れるという子供は小建中湯がいいんだ。私は小建中湯でよく治すが浅田宗伯は桂枝加竜骨牡蠣湯で治すと方函口訣に書いてある。私は桂枝加竜骨牡蠣湯より小建中湯の方がいいように思うけど。一度だけ桂枝加竜骨牡蠣湯でおねしょを治したことがあるけどね。小建中湯を使う子供はだいたい冷え性で昼間でも小便の回数が多かったりする。第四条の「男子。黄。小便自利」とあるのは肝炎などで黄疸になっている状態を指すんだ。肝炎で黄疸になると普通は小便不利になるんだけどここでは小便自利になっているね。小便がたくさん出るということが小建中湯を使う目標になってくるわけね。これは急性ではなくかなり慢性の肝炎で病気がこじれている場合です。私の本（漢方治療の実際）にも引用しておいたけど矢数有道君が診た患者で、台湾から東京まで来た子供だったが黄疸が出て肝臓がひどく腫れて、小便がよく出るというところを目標に小建中湯を使ってよくなったことを東亜医学という本に発表されていた。そのまま引用させてもらいました。漢方治療の実際を読んでみてください。第五条は「婦人。腹中痛」とあるが「当帰芍薬散之れを主さどる」という条も「小建中湯之れを主さどる」という条もあるし色々あるからこの文章だけでは使えませんね。